

# ワルシャワ日本人学校での体験活動について

前ワルシャワ日本人学校 教諭

埼玉県吉川市立栄小学校 教諭 矢野 聖也

キーワード：体験活動，校外学習，現地校交流

## 1. はじめに

ポーランド共和国はヨーロッパの中央に位置している。緯度が高いために日照時間や気温の変化が大きく冬の寒さは厳しいが、新緑の季節は花が咲き乱れて大変美しい。ポーランドという国名は、平野を意味する「ポーレ」という語に由来し、広大で豊かな大地が広がる。首都ワルシャワは20世紀の激動の時期を最も見守った街と言っても過言ではない。第二次世界大戦で町の大半が壊滅したが、戦後に市民の不屈の精神で再建された旧市街は世界遺産に登録されている。現在のワルシャワは建設ラッシュが続き、かつてない速さで成長を続けている。ワルシャワの人口は170万人。ポーランド人の日本への関心は高く、ワルシャワ大学を初め多くの大学に日本学科が設置されており、日本語を巧みに話す学生がテレビ等で紹介されている。

ワルシャワ日本人学校には小学部と中学部が併設され、児童生徒数は23名である。毎朝、保護者の責任のもとで児童生徒が登校し、職員が校門で出迎える。「おはようございます」という挨拶の後、「ジン ドブリ」とポーランド語の挨拶が続き、笑顔とともに一日が始まる。子ども達は多様な体験活動を通して、健やかに成長している。

## 2. 活動報告

### (1) 教育課程

2010年は、ショパン生誕200周年、そして5年に一度開催されるショパンコンクールの開催年であった。ワルシャワ日本人学校の子供達はポーランドの音楽を楽しみ、ピアノやバイオリン等の楽器のレッスンを受講したり、毎週開催されているコンサートやオペラを鑑賞したりして音楽に親しんでいる。その特色を生かし、ワルシャワ日本人学校では毎学期にミニコンサートを開催し、子ども達が素晴らしい合唱や合奏を披露している。また、学習発表会では合唱・合奏に加え、和太鼓も披露する。和太鼓に初めて触れる子どもも多く、最初はぎこちない動きだが、発表会本番では堂々とした姿で演奏し、毎年喝采を受けている。現地のフェスティバルに出演する機会もあり、現地理解や交流活動のよい機会となっている。夏には日本人会との共催で大運動会を開催する。特に、子ども達が披露する「よさこいソーラン」は大盛況である。事前の練習では、中学部や高学年の児童生徒が低・中学年の指導を行うが、活動の中で自然とリーダー性も養われる。



日本人会との共催で開催される運動会で「よさこいソーラン」を披露する子ども達

全校児童生徒が参加する野外活動も同様で、カレー作りやウォークラリーの企画・運営を上級学部が進め、毎年充実した活動・思い出づくりとなっている。ポーランドの秋は「黄金の秋」と呼ばれるほど美しい。燃えるような

紅葉の中で、PTAと日本人会の共催で秋祭りが開催される。日本のお祭りの雰囲気を経験できるようにと射的やヨーヨー釣り、的当てコーナー等を手作りで運営し、子ども達はお祭りの雰囲気を楽しんでいる。冬季は体育の学習でスケートに取り組む。現地講師に指導を受け、子ども達はどんどん技術が上達していく。スケートの学習が終わる頃には、後ろ滑りやスピン等ができるようになる子どももいる。また、校庭に自作のスケートリンクを作り、休み時間に楽しめるのも本校の特色の一つである。

その他、現地理解教育の一環として、ポーランド語の授業を週1回、英会話を週2回実施している。どちらの授業も現地講師による授業で、子ども達はどんどん語学力を伸ばしている。身につけた語学力を活用し、現地校との交流会も実施している。本校に現地校の子ども達を招待し、ポーランド語で日本文化を紹介したり、男子は法被・女子は浴衣を着て「炭坑節」の踊り方を教えたり、現地校に招待され、ポーランド各地の伝統文化やダンスを教えってもらう機会にも恵まれた。豊かな体験活動を重ねることができる素晴らしい環境の中で、子ども達は学校生活を送り、力を伸ばしている。

## (2) 授業実践

### ① 生活科の活動報告

生活科の授業に際して日本より持参した「アサガオ」「ヘチマ」「ミニトマト」の種を植えてその後の成長の様子を観察した。種を植えて約1週間でどの種も発芽したが、その後本葉が3～4枚になるころに葉の一部が枯れ始め、最終的に全ての苗が枯れてしまった。ポーランド人スタッフに確認したところ、5月末の満月の夜は、例年0℃近くまで冷え込むため、地元の農家では寒さに弱い野菜の苗は、その時期が過ぎてから屋外に植えるとのことであった。一方、ポーランドのミニトマトやアサガオの種も併せてに植えていたので、その苗を生活科の学習で活用し、一人一鉢の苗として継続して栽培し、観察を行った。ポーランドのミニトマトの苗は、日本の苗と比べると縦ではなく横に広がる特性をもっている。最終的な苗の高さは40～50cmだが、横幅は1mを超えていた。また、花の色は黄色で、日本のものと同じであったが、ミニトマトの実は少し縦長の形をしていた。子ども達は観察した内容を日記にまとめ、学習発表会で発表した。

学習発表会では、ミニトマトの観察記録とともに1年生で扱う国語の教材「大きなかぶ」について、日本とポーランドの内容を比較し発表した。

日本の物語では、おじいさん、おばあさん、まご、いぬ、ねこ、ねずみが登場し、大きなかぶを引き抜くが、ポーランドではねこの後に、にわとり、あひる、コウノトリ、かえる、スズメが登場し、協力してかぶを引き抜く。

同じ物語であっても、国によって内容が異なる面白さを子ども達に伝え、比較する面白さを実感させた。



ポーランドの国語の教科書で紹介されている「大きなかぶ」

### ② 社会見学（ワルシャワ蜂起博物館）

ワルシャワ蜂起博物館は、戦争で傷ついた人々の資料も展示しているため、子ども達に見学させても良いかと正直悩んだ。しかし、保護者の承諾を得て、実際に博物館を見学した子ども達の感想に、戦争の悲惨さや怖さを感じ二度と戦争が起こってほしくないという思いや、ドイツ軍に立ち向かったポーランドの人達の勇気をたたえる内容が書かれているのを読み、見学させて良かったと感じた。

## 〈児童の作文〉

ほうき博物館では、地下下水道の展示があり、中を歩いてみるととても暗かったです。でも、当時はし尿が地下下水道の中にいっぱい入っていて大変だったと思います。昔の映像も見ました。戦争の時代は家がぼろぼろにこわれていました。戦争はとてもこわいと強く思いました。お母さんをワルシャワほうき博物館と民族博物館に連れて行きたいです。

### ③ 修学旅行（クラコフ・オイツェフ方面）

修学旅行で、高学年及び中学部の児童生徒を引率し、クラコフ・オイツェフ国立公園を訪れた。ポーランドと言えば、アウシュビッツ（オシフェンチム）を思い浮かべる日本人が多い。一方、ポーランド人は、そのイメージを好んでいない。ポーランドの受けた傷跡は深いが、それを上回る素晴らしい文化や自然があり、それを是非知って欲しいとの願いが強い。実際に、ポーランドの10の伝説が残るバベル城の竜の洞窟や、国立公園内の蜘蛛の巣洞窟を訪れると、その伝説を支える歴史的な背景を知ることが出来た。クラコフはタタール人の侵略を受けたが、タタール人とはモンゴル民族のことである。ジンギスカンの長男がキエフ公国を治めていたが、その息子がヨーロッパ（ポーランド）に侵攻した。二度にわたる侵攻を止めたのがポーランドであった。日本の元寇と併せて考えると、東西でモンゴルの侵攻を食い止めた国であることが分かり、子ども達も驚きの声を上げていた。その他、岩塩を長年にわたり採取し、地下の巨大空間となっているヴィエリチカ岩塩坑等の世界遺産も併せて訪れ、現地理解を深めることが出来た。なお、より深くポーランドの文化や歴史を知るために、毎年、修学旅行の訪問先を変更する等、工夫を行っている。

### ④ 現地校との交流会

現地理解教育を推進するために、ワルシャワの私立小学校（9 STO）と年3回の交流会を実施している。以前より、ワルシャワ大学日文学科の学生、また市立高等学校の生徒と交流を行ってきたが、同年代の子ども達との交流を是非実施したいとの思いにより、交流できる現地小学校を求めていたところ、9 STOとの交流が実現した。6月の交流会では現地校を訪問し、ポーランドの食べ物や民族衣装、地方に伝わるダンス、切り絵を紹介して頂いた。10月の交流会では、9 STOの子ども達を学校に招待し、本校の子ども達が炭坑節の踊り方を教えた。子ども達は、ポーランド語の授業で身につけた言葉やジェスチャーを駆使し、一生懸命に踊りの振り付けを説明した。また、9 STOの子ども達からは、ダンスの踊り方を教えて頂いた。互いに練習に取り組み、それぞれが上手に踊れるようになると、子ども達は自然に喜びを表現し、文化だけでなく心の交流も図ることが出来た。2月の交流会では、子ども達が折り紙、独楽回し、お手玉、習字のブースを開き、9 STOの子ども達に日本の文化を紹介することが出来た。

## 3. さいごに

実際にポーランドで生活し、ポーランドの素晴らしい文化や美しい自然をたくさん発見した。何より、歴史的な背景が培ったポーランドの人々の祖国に対する愛国心の強さを実感した。また、日本の文化を大切に思う気持ちを改めて実感することができた。秋祭りや餅つき会等、海外でありながら日本以上に日本らしい行事を実施し、子ども達がそれを楽しみにしている。学校と日本人コミュニティーが、子ども達の教育に関する取り組みは勿論、豊かな体験活動の計画・実施に本気で取り組んでいる。日本から離れているからこそ、日本を大切に思う気持ちが強まるのだと実感した。さらに素晴らしいものをポーランドで得ることができた。それは、子ども達、職場の仲間、世界で活躍されている日本人の方々、ポーランドの人達との出会いである。貴重な体験や出会いを、今後も大切にしていきたいと考えている。

最後に、ワルシャワの地で得ることのできた貴重な経験を、未来を切り開く無限の可能性を秘めた子ども達にしっかりと伝えることにより、これからの日本を支え、世界で活躍する人材を育みたい。